

(惜別) 文化人類学者 片倉もところさん

朝日新聞 2013年04月22日

女性イスラム研究者の草分けである。衣食住など柔らかい視点でイスラムを探究。「アラビア・ノート」「イスラームの日常世界」などの著書を残した。

1968年から2年間、サウジアラビアで遊牧民と暮らした。男女を隔離するイスラム社会を逆手にとるように、出産や男女別の結婚パーティーにも立ち会った行動派の学者だった。

モンゴルの遊牧民を研究する小長谷有紀(こながやゆき)・国立民族学博物館教授(55)はその影響で学者を目指した世代だ。「女性研究者には、女性を捨てざるをえなかった世代、活用した世代、関係なくやっていく世代と3世代があるのですが、先生は活用世代の先頭走者だった」と語る。

関西との縁が深かった。2005年には女性で初めて国際日本文化研究センター(京都市)の所長に就任。その前、81年から12年間は国立民族学博物館(大阪府)の教授も務めている。引っ張ったのは、当時の梅棹忠夫館長である。

その梅棹さんばりの造語の名手だった。ごろんとする、家族とすごすというニュアンスのアラビア語「ラーハ」を「ゆとろぎ」と訳した。「ゆとり」に「くつろぎ」を足し、「りくつ」を引いた造語だ。人生を慈しむイスラムの豊かな生活感覚と英知を、時間に追われる日本人に伝えようとしたのだろう。

夫の邦雄さん(79)は駐エジプト大使を務めた元外交官。「外交と研究を二人三脚で支え合った同伴者だった」と語る。

2年前に手術した大腸がんが再発。東京の自宅で緩和ケアを受けた。暮れには邦雄さんらに見守られながら親交のあった人たちへの手紙をこう口述した。

「人生最後のフィールドワークにでかけることにいたしました。パソコン環境もよくないところで、ましてや、郵便もとどきません」

(大村治郎)



かたくら・もところ 本名・片倉素子(かたくらもところ) 2月23日死去(大腸がん) 75歳3月2日密葬